

食材・地域・人
ふれあい紀行



産地と消費者

顔の見える、関係づくりと

地産地消への取り組み

能登灘浦／岸端定置網組合



問 産業部農林水産課
☎53-8422

七尾市の北東に突き出している岡山半島の先端から富山県水見市まで、富山湾に面してなだらかで風光明媚な海岸線が約42キロメートルに広がる「能登灘浦」には、ゆたかな自然の恵みと人々が共生する、めくもりのある生活風景が点在しています。

そんな能登灘浦の各漁港では、藩政時代から定置網漁業が盛んです。

そのなかにあつて、定置網漁業として全国屈指の漁獲量を誇り、それを支える大規模な3統の大敷網（おおしきあみ）を保有しているのが「岸端定置網組合」です。

同組合は庵漁港、庵北漁港、百海（どうみ）漁港、江泊（えのとまり）漁港の4箇所を基地漁港として、これまで伝統ある漁業活動に励んできました。

昨年12月18日から、漁業者の新しい試みの一つとして庵漁港の一面で、水揚げされたばかりの「いきいき七尾魚」を市場の卸売価格を参考に計り売りする「朝市」を開催しています。

この取り組みは、全国に名が通り、市外への流通の多い岸端の網で捕れた新鮮

で旨い魚を地元である七尾市民のみならずの食卓に届ける“地産地消”を第一の目的としています。

岸端の朝はとて早く、まだ、日も昇らない時間に船頭の木下 惇(あつし)さんを中心に56人の漁師(すべて地元出身)たちが複数の作業船に乗り込み、網をおこしに漁場へ向かいます。

岸端の漁場は、江泊町の白鳥区の沖合い約1〜3キロメートルで、この一帯の水深は約50〜150メートルと沿岸部から急勾配に深くなっています。

このように、海底まで一気に落ち込む斜面は「ふけ」と呼ばれ、魚群はふけに沿って沿岸部に泳ぐ習性があります。

定置網漁業はこの習性を利用した漁法です。

岸端の3統の大敷網は、魚群の“道筋”であるフケに沿って、氷見市側から泳いでくる魚群を理想的に誘い込むように、



沿岸から沖へと手をつなぐように設置されています。

漁場につくと、2基のクレーンが取り付けられた最新の大型の中船(作業船)を中心に中型の側船(作業船)がその脇を固めるように左右に1隻づつ配置され、船団の向かい側で網の片方を船の側面に固定し待機している魚積船(運搬船)へと網を巻きあげながら、船団を寄せていきます。

船同士の間隔がなくなるにつれ、活きの良い魚群が姿を現します。

比較的、数の少ない大型魚は大きな手網で1匹づつすくいあげ、数の多い小型〜中型魚はクレーン式の網で一度に多くの量をすくいあげます。どちらの魚も滅菌冷海水が注ぎ込まれた魚槽や水槽へ丁寧に移されます。

さらに鮮度と旨さを保つために槽の中に氷をふんだんに入れ沖めを行います。

網内の魚を捕り終えると魚積船は急ぎ帰港し、魚は荷揚げされ市場などへ出荷されます。中船・側船は網を戻し、次の漁場へ移動します。その間、船上では漁師たちが朝食をとります。

“天然のいけす”と称えられる豊饒な富山湾で捕れる旨い魚、それが消費者の手元まで旨く、しかも安全で安心な食材として届く理由は、鮮度や旨さを損なわせないようにとこだわりぬき、先人から連綿と引き継がれてきた岸端の漁法という文化です。

また、定置網漁業は古典的な漁法であり、地引網や底引網、巻網と大きく違う点は、魚自身が網に入り、そして出ていくことができるということです。実際、

網に入った魚の3割程度しか捕れませんが。そこからは、自然の恵みに対する先人たちの感謝の気持ちと資源保護や環境保全など自然に対するやさしさが伝わってきます。

岸端の朝市は、短時間の営業と駐車スペースが少ないにも関わらず、口コミを耳にした人や庵漁港そばの国道160号沿いに取り付けられた看板を目にした大勢の人が魚を買い求めに訪れています。

また、庵漁港は近代的な漁港として生まれ変わるため、平成12年度から(平成22年度完成予定/総額56億円)大規模な漁港の整備事業が進められています。

石垣康弘組合長は「七尾市の地域資源である大敷網の歴史や文化、そこで捕れる海の恵や漁港、そして魅力ある漁業関係者とふれあつて欲しい」と地元を軸足を置き、七尾市という地域とともにさらなる発展をめざしています。



岸端の網産の
“いきいき七尾魚”に
出会いにいきませんか!

開催日時 毎週月曜日〜土曜日

6:30〜7:30ころまで
(天候不良の日は開催していません。)

会場 庵漁港
価格 開催日の市場の卸価格を
参考に計り売りします。

(消費税別途)

問 岸端定置網組合

☎ 59-1511